



NCI キャンサーブレティン2011年10月18日号 (Volume 8 / Number 20) -米国国立癌研究所発行

NCI Cancer Bulletin for October 18, 2011 - National Cancer Institute

<http://www.cancer.gov/ncicancerbulletin/101811>

■特集記事

「心毒性のより低い化学療法は一部の HER2 陽性乳癌患者にとって一つの選択肢になる可能性がある」

■癌研究ハイライト

- ・高線量の放射線治療は肺癌患者の生存期間を改善しない
- ・BRCA 遺伝子変異が卵巣癌治療における生存期間と奏効率に影響を与える
- ・新規抗癌剤が甲状腺の正常機能を侵す可能性あり
- ・大腸癌関連性の細菌が 2 件の独立した研究で発見された

■特別レポート

「ビタミン E サプリメントが前立腺癌リスク増加と関連」

■クローズアップ

「ジエチルステルベストロールのその後: 出生前薬物曝露の害を追跡」

■AHRQ 情報

「前立腺癌検診の勧告案にパブリックコメントを募集」

「新しい子宮頸癌検診の勧告案にパブリックコメントを募集」

■～その他の記事タイトルと要約 (原文)～

注目の臨床試験

癌研究者プロフィール

がんセンター紹介

その他の情報

特集記事

■心毒性のより低い化学療法は一部の HER2 陽性乳癌患者にとって一つの選択肢になる可能性がある

乳癌国際研究グループ(BCIRG)006 試験の結果によれば、アントラサイクリン系薬剤を用いない化学療法と標的療法 **トラスツズマブ**(ハーセプチン)の併用は、一部の HER2 陽性乳癌患者にとって一つの選択肢になる可能性がある。この結果は、アントラサイクリン系薬剤を用いない化学療法にハーセプチンを併用する初めての大規模ランダム化乳癌試験から得られたもので、10月6日付 New England Journal of Medicine 誌で報告された。

アントラサイクリン系薬剤は効果のある抗癌剤であるが、心臓障害や二次原発癌などの長期的副作用を起こし得る。トラスツズマブも心臓障害を起こし得るので、この2薬剤を組み合わせることで心臓へのリスクをさらに増大させる可能性がある。

BCIRG-006 で検討されたアントラサイクリン系薬剤を用いない療法は、トラスツズマブと、**ドセタキセル** または白金剤を中心とした化学療法剤との間の相乗効果が示された実験データに基づいていた。「その療法によってアントラサイクリン系薬剤を中心とした療法にみられる心毒性を避けられるのではないかという期待もあった」と、カリフォルニア大学ロサンゼルス校ジョンソン総合がんセンター臨床／橋渡し研究責任者の Dr. Dennis Slamon 氏が率いるこの研究論文の著者らは書いている。

41カ国の研究者が3,222人のHER2陽性乳癌患者をこの試験に登録した。患者は、手術後、次の3つの化学療法のうちの1つの投与群に無作為に割り付けられた。すなわち、**ドキシソルビシン**(アントラサイクリン系) + **シクロホスファミド** + **ドセタキセル**(AC-T) 投与群と、AC-T にトラスツズマブを追加する投与群、**ドセタキセル** + **カルボプラチン** にトラスツズマブを追加する(TCH) 投与群である。ドセタキセルの製造者であるサノフィ・アベンティス社が研究助成を行い、トラスツズマブの製造者ジェネンテック社も助成している。

追跡期間中央値5.4年で、トラスツズマブの投与を受けた両群の患者の5年無病生存率(AC-T+トラスツズマブ群で84%、TCH群で81%)は、AC-Tのみの群(75%)より優れていた。このトラスツズマブを用いる両投与群とAC-T群との差には統計学的有意性が認められた(無病生存の定義は、乳癌の再発、二次原発癌、全死因死亡のない期間とされた)。

トラスツズマブを用いる2つの投与群間では無病生存率と全生存率において有意差は認められなかったが、この試験はトラスツズマブを用いる両投与法とトラ

スツズマブを用いない投与法とを比較するようにデザインされていて、トラスツズマブを用いる投与法同士を比較するものではなかった。



アントラサイクリン系薬剤を中心とした化学療法と標的薬トラスツズマブは効果のある抗癌剤であるが、心臓障害を起こし得る

そのため、トラスツズマブを用いる投与法で一方がもう一方より優れているかどうかについて決定的な答えはないとNCI 癌治療・診断部門(DCTD) バイオメトリック研究科の研究者 Dr. Sally Hunsberger 氏は説明した。その代わりに、著者らは、両投与法で乳癌に関連する事象が多いか、また高度のうっ血性心不全が多いかを比較することにより、癌関連事象が起こらないことと心臓事象が起こることとの間のトレードオフ(二律背反関係)に注目した。

癌の遠隔再発は、TCH 群では144人に認められたが、AC-T+トラスツズマブ群では124人であった(20件の差)。しかし、高度のうっ血性心不全は、AC-T+トラスツズマブ群で21人に認められたのに対し、TCH 群では4人であった(17件の差)。さらに、AC-T+トラスツズマブ群患者の18.6%に無症候性の心機能低下が認められたが、TCH 群では9.4%であった。

TCH の投与を受ける患者にはおそらく癌再発が若干多いが、「心臓事象があってもアントラサイクリン系薬剤を用いるべきだろうか」と Hunsberger 氏は問いかけた。各患者とその主治医は、後の副作用のリスクと再発のリスクを天秤にかけてどちらの治療法が自分たちの状況によりふさわしいかを定める必要があると同氏は述べた。「もし患者に心疾患があるなら、おそらく TCH が妥当な療法です」。

まとめると、この試験から得られたデータは「一つの投与法がもう一方より優れているとは、はっきり示していない」とシガン大学総合がんセンターの Dr. Daniel F. Hayes 氏は、**付随論説**の中で書いている。そして、「HER2 陽性早期乳癌の術後療法として、TCH がもう

一つの(だが唯一のではない)標準治療であることがこれらの情報から立証された」と結論づけた。

「トラスツズマブを用いる両投与法は『標準』とみなし得るということに賛成です」と DCTD の乳癌治療リーダーである Dr. Jo Anne Zujewski 氏は述べた。「この研究により、トラスツズマブを中心とした治療法は、化学療法の根幹としての TC との併用であるか AC-T との併用であるかにかかわらず、HER2 を過剰発現している腫瘍を持つ患者には顕著な利益があります」。

心臓に対する長期的影響をさらに解明するためには、アントラサイクリン系薬剤とトラスツズマブの併用投与を受けたこの試験の被験者やその他の患者の追跡調査を続けることが重要になると Slamon 氏は述べ、「多くのこのような研究には長期的安全性データがなく、それが大問題なのです」と説明した。

BCIRG-006 の研究者らは、10 年間(中央値)、この試験の被験者を追跡調査して、有効性と安全性のデータをさらに集めようと計画している。

— Sharon Reynolds

癌研究ハイライト

◆ 高線量の放射線治療は肺癌患者の生存期間を改善しない

先週発表された報告によれば、手術の対象とならないⅢ期非小細胞肺癌(NSCLC)患者に高線量の放射線治療を施行しても、生存期間が改善されない。この知見は、マイアミで開催された米国放射線腫瘍学会(ASTRO)年次総会で発表された第3相ランダム化試験の中間解析に由来する。

試験責任医師であるワシントン大学医学部 Dr. Jeffrey Bradley 氏は、「(これによって)診療が変わると思う」と記者会見で述べた。

本試験は、NCI が助成している米国腫瘍放射線治療グループによって実施されており、当初はセツキシマブ(アービタックス)を追加した標準化学療法または追加しない標準化学療法と併用する放射線治療で、放射線量 74 Gy と標準の 60 Gy を比較した。中間解析(死亡数 90 時点)の結果から、線量 74 Gy の治療を受けた患者に全生存期間の改善がみられる見込みがないことが統計的に明らかになったため、2011 年 6 月に高線量放射線治療群の参加者登録を打ち切った。

中間解析の時点で 423 人の患者が試験に登録していた。高線量放射線治療群の方が治療に関連した死亡が

多かった(7 人対 3 人)が、解析によれば、この差が同群の生存率の低さを説明するものではなかった。

本試験は、近傍のリンパ節まで広がったⅢ期 NSCLC 患者に対する放射線治療の異なる線量を比較したものとしては、過去 30 年で初の臨床試験であると Bradley 氏は説明した。本試験は引き続き、線量 60 Gy の放射線治療と化学療法との併用療法でセツキシマブの有無を比較する 2 群を継続している。

Bradley 氏によれば、Ⅲ期肺癌患者に対しては線量 60 Gy が標準であるとされてはいるものの、単一施設で実施されたいくつかの試験から、これより高線量を用いても新たな副作用を起こすことなく生存期間を改善できることが示唆されていた。ASTRO 元会長であるボカロン地域病院の Dr. Tim Williams 氏は、同病院では過去 5 年間、60 Gy よりも高い線量を標準としてしていると話した。

NCI の癌研究センター腫瘍内科長 Dr. Giuseppe Giaccone 氏は、この結果は、Ⅲ期肺癌患者に対する高線量の放射線治療を止める必要があることを強く示唆していると述べた。

◆ BRCA 遺伝子変異が卵巣癌治療における生存期間と奏効率に影響を与える

10 月 12 日付 JAMA 誌に発表された新たな研究によると、BRCA2 遺伝子に変異をもつ卵巣癌女性では、変異をもたない女性の場合と比較して標準的な化学療法がより強く奏効し、全生存期間と無増悪生存期間が延長する可能性がある。この研究では、BRCA1 遺伝子に変異をもつ女性の全生存期間と無増悪生存期間が、変異が認められない腫瘍をもつ女性と比べて良好である

ことが示されたが、後者の所見は統計的に有意ではない。

この観察研究を行ったテキサス大学 MD アンダーソンがんセンターの Dr. Da Yang 氏らは、高悪性度漿液性卵巣癌女性 316 人から採取した腫瘍のゲノムデータと臨床データを解析した。データは 2009~2010 年に NCI の癌ゲノムアトラス(TCGA)プログラムから得られ

た。研究に参加した女性の大部分(219人)は、BRCA1 遺伝子変異および BRCA2 遺伝子変異が認められなかった。BRCA2 遺伝子に変異が認められた女性は 27 人のみであり、BRCA1 遺伝子の変異については 35 人であった。

全般的にみて、BRCA2 遺伝子に変異をもつ女性の 5 年生存率が 61%であったのに対し、BRCA1 遺伝子および BRCA2 遺伝子に変異をもたない女性の 5 年生存率は 25%、BRCA1 遺伝子に変異をもつ女性は 44%であった。BRCA2 遺伝子に変異をもつ女性は全員で化学療法に対する奏効がみられた。一方、BRCA 遺伝子の変異をもたない女性の奏効率は 85%、BRCA1 遺伝子に変異をもつ場合は 80%であった。

「BRCA1 遺伝子および BRCA2 遺伝子の変異には、患者の生存率に関して、BRCA 遺伝子に[変異をもたない]場合とは異なる関連性があることを裏付ける証拠がわれわれの観察所見から得られた。また、このような違いから白金製剤を主とする化学療法への顕著な奏効率が生じた可能性があり、ゲノム不安定性との関連性が

異なる可能性を示唆する証拠も示されている」と論文の著者らは記している。今回の研究は規模が比較的小さいため、この所見を実証するためにはより規模の大きな研究が必要であることを著者らは認めている。

今回の研究結果によって卵巣癌の新たな治療に対する試験方法を理解する上で「大きな進展」が得られたと、コロンビア大学医療センターの Dr. Victor Grann 氏と Dr. Ramon Parsons 氏は同号の[解説記事](#)に記述している。たとえば卵巣癌患者に対する PARP(ポリ ADP リボースポリメラーゼ)阻害薬の臨床試験では、BRCA1 遺伝子に変異をもつ患者と BRCA2 遺伝子に変異をもつ患者の間に奏効率の違いが認められるかを調べるのが可能であろうと述べた。

今回の研究より規模の大きな [NCI 主導による試験](#)が今年前半の米国癌学会年次総会で発表されているが、ここでも BRCA2 遺伝子変異をもつ卵巣癌女性の全生存期間の延長などの同様の結果が得られている。

関連記事:「[BRCA1 タンパク質が腫瘍抑制因子として機能する仕組みが示された](#)」

◆ 新規抗癌剤が甲状腺の正常機能を侵す可能性あり

この 10 年来、多くの癌患者が新しい分子標的薬や免疫療法の開発による恩恵を受けてきた。一方、本日 Journal of the National Cancer Institute 誌電子版に発表された報告によれば、このような薬剤によくみられる副作用が、思いもかけなかった甲状腺への影響の結果である可能性がある。

ブリガム&ウィメンズ病院の Ole-Petter R. Hamnvik 氏が甲状腺機能障害と新しい抗癌剤治療に関する科学文献を調べたところ、チロシンキナーゼ阻害薬や [イピリムマブ](#)などの免疫療法を含む新しい治療法を受けた患者の約 20~50%に甲状腺機能障害が生じていることが判明した。

新規の抗癌治療によくみられる副作用に甲状腺機能低下があり、倦怠感や便秘などをひきおこす。このような症状は癌患者によくみられるため、もともとの癌による症状なのか、症状緩和に用いられた薬剤によるものなのかを見分けることが難しい。甲状腺機能障害の症状にはこのほかの治療により起こった毒性作用と区別しにくいものがあり、治療薬を減量したり治療の頻度を減らす結果となりかねない。

Hamnvik 氏らは、このような治療を受けている患者に甲状腺機能障害の徴候があるかどうかを医師が慎重に監視することを推奨しており、「これによって甲状腺疾患の早期発見と早期治療が可能になり、原疾患である癌の治療を続けながら患者の QOL も改善できる」と述べている。

本報告の著者らはまた、新規抗癌剤の臨床試験では、必ず医師が甲状腺機能を監視することを推奨している。著者らは、発表データのほとんどが小規模研究または予備研究から得られたものであることを指摘して、このような治療に起因する甲状腺異常の機序を理解し、この分野で答えが出ていない多くの疑問を検討するにはさらに研究が必要であることを付け加えた。

結びに、「甲状腺疾患の治療は安全であり、患者の QOL を向上させやすく、もともとの癌に対する効果的な治療を継続できる可能性がある」と述べている。

◆ 大腸癌関連性の細菌が 2 件の独立した研究で発見された

2 つの独立した研究グループが大腸癌に関連のある 1 種の細菌を同定した。どちらの研究も、この発症頻

度の高い癌と感染要因との間に存在する関連性の可能性を確認した初めての研究である。しかしこうした所

見を確認し、この細菌が大腸癌の発症に関与しているかを判断するにはさらに研究が必要であると、両グループの研究者らは強調した。両研究は 10 月 18 日付 Genome Research 誌電子版に発表された。

フゾバクテリウム属のこの微生物は、数兆個もの細菌および数千個もの細菌種の生息するヒトの大腸にはあまり多く生育していない。しかしフゾバクテリウム属は炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎など）といった数多くの疾患に関与しており、大腸癌の危険因子の 1 つである。

どちらの研究グループも同じような研究アプローチを用いた。Dr. Robert Holt 氏が率いるブリティッシュ・コロンビア癌研究所の研究チームは、まず 11 の大腸癌検体と、同じ患者から採取した腫瘍に隣接する健康な大腸組織に対してハイスループット RNA 配列解析を行い、フゾバクテリウム属の過剰を確認した。マサチューセッツ工科大学とハーバード大学共同のブロード研究所の Matthew Meyerson 氏率いる研究グループは全ゲノム配列解析を行って、9 人の患者の大腸癌検体と正常大腸組織検体に細菌 DNA を同定した。

どちらの研究グループもポリメラーゼ連鎖反応 (PCR) 技術を用いて、さらに多くの患者の大腸癌検体と正常な大腸組織検体についてこの所見を確認した（検体数はそれぞれ 88 および 95）。

Holt 氏らが PCR 解析を行った検体では、「腫瘍検体のフゾバクテリウム量は、対応する正常検体と比べて、全般的に平均して 415 倍に増えていた」と報告された。Meyerson 氏のグループでも同様の所見が得

られたが、「一部の癌組織でフゾバクテリウム属が劇的に過剰であったに過ぎない」とされた。

Meyerson 氏らは、11 検体の大腸癌転移巣のうち 2 検体でもフゾバクテリウム属を検出した。

「この細菌の存在は、単に免疫抑制部位での日和見感染を示す可能性もあるが、おそらく前炎症機構を介して腫瘍発生に関与する可能性も考えられ、さらに追求する価値のあるものである」と Holt 氏らは書いている。

腫瘍の細菌構成を解析すると、別の患者の腫瘍検体の細菌構成よりも、同一の患者から採取した対照用の正常組織検体の細菌構成との間に類似性が強く認められたと、NCI の癌生物学部門の Phil Daschner 氏は記した。これから「腫瘍の細菌叢の形成では、個々の遺伝的要因、その他の細菌、細胞由来成分、食物由来成分、代謝産物などを含む患者の消化管生態系が、腫瘍の微細環境よりもずっと重要である」ことが示唆されると同氏は続けた。

この所見はまた、大腸の細菌構成に基づく予防や診断、治療のための戦略の可能性も示していると同氏は述べた。

特別レポート

■ ビタミン E サプリメントが前立腺癌リスクの増加と関連



新しい試験によりビタミン E サプリメントによる前立腺癌リスクの増加が示された。

参加者の長期間追跡調査によりわかった。クリーブランドクリニックの Dr. Eric Klein 氏らが 10 月 12 日付 JAMA 誌で本知見を報告した。

前立腺癌に関する大規模な予防試験に参加した男性のうち、ビタミン E サプリメントを服用した群ではプラセボ群に比べ前立腺癌を発症するリスクが高まる

ことが、試験

この結果はセレンおよびビタミン E 癌予防試験 (SELECT) によるもので、同試験には前立腺癌リスクが平均的で比較的健康的な男性 35,000 人以上が参加した。本試験は 2008 年に**早期中止**となった。計画された中間解析の結果、ビタミン E およびセレンは単独でも併用でも前立腺癌を予防する可能性はないことが示されたためである。

試験が中止となった時点で試験参加者にはサプリメントを服用しないよう伝え、その後も追跡調査を続けた。中間解析では、その時点で統計学的に有意な結果ではなかったものの、ビタミン E が前立腺癌リスクの増加と関連している可能性も示唆された。

その後の追跡調査により、400IU/日のビタミン E を服用した群の男性は、プラセボ群の男性に比べ前立腺癌リスクが 17%高くなっていることがわかった。この差は統計学的に有意であった。

ビタミン E に関する証拠

Klein 氏らは結果の報告のなかで、全体的に見てビタミン E は多くの疾患において予防効果を示さなかったことに触れている。「証拠全体として、ビタミン E が他の疾患を予防することは示されておらず、今やわれわれは前立腺癌リスクを高めるといふ証拠を得ました」と Klein 氏は話している。

健康をうたっている市販の製品に臨床試験により効果を示した強力な証拠が示されていない場合、消費者は疑ってかかる必要がある、と著者らは強調した。

「SELECT などの試験により、われわれが投与する医薬品には、効果をもたらす可能性があると同時にわずかなではあるが害を及ぼす可能性もある、ということに一步下がって気づかされます」と共著者でブリガム & ウィメンズ病院の Dr. J Michael Gaziano 氏は述べている。

「われわれがこれらの大規模ランダム化比較試験、とりわけ広く使用される薬剤の試験に携わっているのはそういう理由からです」と Gaziano 氏は付け加えた。

米国の 60 歳以上の男性では半数以上がビタミン E を含有するサプリメントを摂取しており、SELECT で設定した用量を摂取している男性は 23%に及ぶ、と著者らは言う。それゆえ前立腺癌リスクが増加するという今回の知見には「大きな意味」がある。

前立腺癌リスクの増加はサプリメント摂取の中止後のみ現れる。「これらの物質はかなり効果が持続するようです」と Klein 氏は述べ、臨床試験のデザインをする研究者はこの可能性を考慮に入れるべきだとした。

「SELECT 試験では他にも栄養サプリメント高用量摂取のリスクの可能性を示す教訓的エピソードがあります」とハーバード大学医学部の Dr. JoAnn Manson 氏は述べた。同氏は本研究に関わっていない。「以前に見かけた事例ですが、こういったランダム化比較試験の重要性を示しています」。

1980 年代初頭に、臨床試験において β カロテンが肺癌リスクを高める(特に喫煙者)という害が示されるまでは、「健康をもたらす特効薬」と広く考えられていたと Manson 氏は述べた。

また、別の大規模ランダム化比較試験である Physicians Health Study II では、ビタミン E と出血性脳卒中リスク増加との関連が示された。

特定の栄養素が欠乏すると健康上の障害をもたらす場合もあるが、高用量のサプリメント摂取では健康上のリスクが効果を上回る可能性もある、と Manson 氏は述べた。同氏はビタミン D およびオメガ 3 脂肪酸に関する大規模ランダム化試験を主導している。

「多くの栄養素には適切な摂取量や血中濃度の範囲というものがあり、それを超えることがよいとは限りません」と Manson 氏は付け加えている。

証拠全体として、ビタミン E が他の疾患を予防することは示されておらず、今やわれわれは前立腺癌リスクを高めるといふ証拠を得ました。

-Dr. Eric Klein

前立腺癌の大半は早期に発見

SELECT は、連邦政府の助成を受けた癌研究協力団体の SWOG が調整し、米国、カナダ、プエルトリコの 400 以上の施設が参加した。医師らは、各地域で最新の検診および生検の標準的手法により参加者をモニターした。一般診療と同様に、PSA 検査を受けた人も受けていない人もいた。

7 年間の臨床試験期間中(5 年半サプリメントを服用し、1 年半服用中止)に、プラセボ群では 1,000 人あたり 65 人が前立腺癌と診断された。

一方、ビタミン E 単独群では 1,000 人あたり 76 人が前立腺癌と診断された。

大半の癌は早期に発見されたため、「前立腺癌による死亡リスクはさほど大きくない」と共著者でテキサス大学サンアントニオ校健康科学センターの Dr. Ian Thompson 氏は話す。

一方で、米国では前立腺癌と診断された男性はそのほとんどが最終的に手術または放射線治療を受けることとなり、性的機能や泌尿器系機能に影響を及ぼす可能性がある、と指摘した。

「もし男性でビタミン E を服用している場合、服用を中止するか主治医に摂取すべき理由を聞いてください」と Thompson 氏は話した。「ビタミン E を摂取すべき理由はないと思います」。

このランダム化比較試験のきっかけとなった以前の研究でビタミン E が前立腺癌を予防することが示されており、SELECT で前立腺癌リスクの増加が示された理

SELECT などの試験は、われわれが投与する医薬品には効果も害をもたらす可能性もあることに気づかせてくれます。われわれがこれらの大規模ランダム化比較試験、とりわけ広く使用される薬剤の試験に携わっているのはそういう理由です。

-Dr. J. Michael Gaziano

由は明らかでない。しかし、今回の試験に参加した集団は異なっており、以前の研究結果は偶然によるものではないかと研究者は話している。

実際、医学的根拠のゴールドスタンダードである前向きランダム化比較試験が今回実施されたのも、まさに以前の研究結果が決定的なものではなく再確認を要するものであったためだ。

SELECT では参加者から生物学的試料を採取しており、同試験でわき起こってきた疑問の解決に取り組むこととしている。たとえば、セレンとビタミン E の両方を摂取した男性では癌リスクが増加しなかったことから、両者間における相互作用の可能性が考えられる。

今回の結果は「厳格な科学的探究」の一例だとして、共著者で NCI 癌予防部門の Dr. Howard Parnes 氏はこう述べる。「科学の考え方とは、観察したことを実験により正しいか確認することです」。さらに、「研究結果が社会通念を覆すことはしばしばです」。

—Edward R. Winstead

SELECT 試験および PCPT 試験の試料を用いた研究提案の期限を延長

セレンおよびビタミン E 癌予防試験 (SELECT) の新データで、ビタミン E を摂取した男性の前立腺癌リスクが高まることが報告されたことから、同試験の生物学的試料を用いた研究提案の期限が延長された。SWOG (以前の Southwest Oncology Group) は SELECT および前立腺癌予防試験 (PCPT) から得られた試料を準備中で、前立腺癌におけるビタミン E の役割の解明など、新しいトランスレーショナルリサーチができるよう幅広い研究分野に提供する。SELECT または PCPT の試料に興味のある研究者は、2011 年 11 月 14 日午後 5 時 (東部標準時) までに SWOG へ同意書を提出すること。本申請の期限は 2011 年 12 月 15 日午後 5 時 (東部標準時)。SWOG は提出された提案を 2012 年 1 月に審査し、同年 4 月に採用結果を発表する。

SELECT および PCPT では、前立腺癌を患っていない男性合計 53,000 人以上を介入群またはプラセボ群にランダムに割り付けており、前立腺癌発症リスクに関連する膨大な臨床データが得られたほか、これに付随する分子、疫学研究などに用いる生物学的試料も得られている。

すでに承認された研究および生物学的試料に関する情報、ならびにデータ要素については SWOG のウェブサイト参照のこと。

クローズアップ

■ ジエチルstilbestロールのその後：出生前薬物曝露の害を追跡



Dr. Robert Hoover 氏は、かつて妊娠中の女性に処方されていたジエチルstilbestロール(DES)に関する新たな研究について論じた(ビデオ作製・編集 Natalie Giannosa)

AHRQ 情報

■ 前立腺癌検診の勧告案にパブリックコメントを募集

米国予防医療作業部会(USPSTF)は先週、「前立腺癌の疑いが高い症状」が認められない健常男性を対象に、前立腺特異抗原(PSA)検査を用いた前立腺癌検診の実施を推奨しないという**勧告案を発表した**。

本勧告案は、主に PSA 検査により診断された前立腺癌の治療に関するコホート研究および臨床試験と、前立腺癌検診に関する臨床試験によってもたらされた結果の再検討に基づくものである。本案では、「前立腺癌の疑いが高い症状を有する男性に対する診断」の一部、または「前立腺癌の診断後や治療後におけるサーベイランスを目的とした」PSA 検査は対象としていないと同会は記した。

本勧告案に関するパブリックコメントの募集期間は 11 月 8 日までである。パブリックコメント募集は、同会(USPSTF)が情報交換する手段であり、本案に反映されると同会は説明している。

パブリックコメントは、**USPSTF ウェブサイト**経由、または Dr. Robert Cosby 氏に郵送で提出できる。

c/o USPSTF, 540 Gaither Road, Rockville, MD 20850

■ 新しい子宮頸癌検診の勧告案にパブリックコメントを募集

10 月 18 日に米国予防医療作業部会(USPSTF)は、子宮頸癌検診の**勧告案**を発表した。本勧告案は、同

会による前回勧告案の改訂であり、パブリックコメントを 30 日間受け付ける。

本勧告案では、性的行為経験があり子宮頸部を有する 21 歳から 65 歳の女性を対象に、3 年ごとのパップテスト(子宮頸部細胞診)を用いた検診の実施を推奨している。また、本案では 30 歳未満の女性におけるヒトパピローマウイルス(HPV)検査を用いた検診を、パップテストを組み合わせた場合あるいは単独実施の場合のいずれにおいても推奨していない。30 歳以上の女性では、「現時点で HPV 検査の実施について、単独実施のみならずパップテストとの併用についても、

有益性と有害性のバランスを評価するにはエビデンスが乏しい」と同会は結論付けた。

本勧告案に関するパブリックコメント募集期間は 11 月 16 日までである。パブリックコメントは、[USPSTF ウェブサイト](#)経由、または Dr. Robert Cosby 氏に郵送で提出できる。

c/o USPSTF, 540 Gaither Road, Rockville, MD 20850

その他の記事タイトルと要約(原文)

◆ 注目の臨床試験【原文】

「全身性軽鎖アミロイドーシスに対するボルテゾミブと化学療法」

未治療の全身性軽鎖アミロイドーシスに対し、メルファラン+デキサメタゾン投与にボルテゾミブを併用する場合と併用しない場合を比較するランダム化第 III 相試験(ESOG-E4A08)

<http://www.cancer.gov/ncicancerbulletin/101811/page6>

◆ 癌研究者プロフィール【原文】

「研究者は語る／Dr. Samuel Achilefu 氏」

光画像技術は、解像度が高いなどのメリットがあるものの組織の深部に到達できないという弱点を持つ。Dr. Samuel Achilefu 氏は、近赤外光を使うことでこの弱点を克服する化学・生物学的画像プローブを利用し、癌の手術中に腫瘍組織からの近赤外蛍光を捉えて腫瘍縁を識別可能なゴーグルを開発中である。また、乳癌における従来のセンチネルリンパ節生検法を改良する技術として光音響画像利用した癌細胞の同定技術や、化学療法の薬物動態をプローブによって分子レベルで観察し、従来はわかるまでに数週間、数カ月を要していた到達状況や効果に関する情報を 24 時間以内に取得できる技術などの開発にも取り組む。

<http://www.cancer.gov/ncicancerbulletin/101811/page7>

◆ がんセンター紹介【原文】

「パデュー大学がん研究センター」

パデュー大学がん研究センターは、500 人以上の研究者や学生が研究を行う施設である。各専門分野の研究者を結集し、生物学的プロセス、新技術、新しい化学物質の発見を元にした革新的な診断装置、癌治療の開発を目指している。

<http://www.cancer.gov/ncicancerbulletin/101811/page8>

◆ その他の情報【原文】

「NCI、コミュニティ臨床腫瘍プログラムの 2011 年の賞を Dr. J. Philip Kuebler 氏に授与」

「アメリカ公衆衛生協会(APHA)の年次総会に NCI の研究者も出席」

「癌の細胞治療に関するサミットが 11 月に開催」

癌免疫治療学会(SITC)と NIH 輸血医療部門が癌の細胞治療に関するサミットを共同開催。トピックには iPS 細胞、免疫リプログラミングなどが含まれる。

<http://www.cancer.gov/ncicancerbulletin/101811/page10>

『NCI 広報誌キャンサーブレティン日本語版』

★メルマガ登録

<http://www.mag2.com/m/0000232914.html>

『海外癌医療情報リファレンス』 <http://www.cancerit.jp>

NCI キャンサーブレティン 2011 年 10 月 18 日号

監修者名(記事順):

原 文 堅 (乳腺科/四国がんセンター)

田中 文啓 (呼吸器外科/産業医科大学)

石井 一夫 (ゲノム科学/東京農工大学)

須藤 智久 (国立がん研究センター東病院)

北村 裕太(内科/東京医科歯科大学医学部附属病院)

顧問 : 久保田 馨(呼吸器内科/日本医科大学付属病院)

この翻訳に関して細心の注意を払っておりますが、全内容を保証するものではありません。

一般社団法人 日本癌医療翻訳アソシエイツ